
エンカウトメモリーズ

露草 遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンカウントメモリーズ

【Nコード】

N4222BA

【作者名】

露草 遊

【あらすじ】

関東圏のとある都市。双葉市で一つの不可解な殺人事件が起こった。

不可解、それは、第一発見者であり重要参考人である少年は、記憶喪失であるということだ。

少年は、記憶を取り戻そうともがきながら、真実を求めて、手を伸ばした。

この作者はミステリー初執筆です。こんなミステリーじゃねえw

Wなどと多々思つかもしれませんが生暖かく見守ってもらえれば幸いです。

〜1〜 (前書き)

どうも露草です。ミステリーなんて書いてしまいました。自分で書いておいて、最後まで書けるのか甚だしく不安です。とりあえず、読んでもらえると嬉しかったり。

〜

起きると、見知らぬ天井だった。

「……ここ、どこだ？」

俺は、首を動かして、周囲を見回してみた。

女の部屋のようだった。妙に小奇麗でファンシーな縫いぐるみがある。ソファや、そこら中にあり、女性物の下着が落ちていたのが決め手だ。片付いてはいるが、若干、片付け方が荒いのも特徴だった。ワnlームで、ベッドからまっすぐ玄関が見える。その事から推測すると、どこかの安いアパートの一室だろう。キッチンは小さくとも、ちゃんとしたものが備え付けられている。

「にしても、どこだ？ここ」

俺は、同じ疑問をもつ一度口にして、上半身を腹筋で持ち上げ、とりあえず、ベッドから体を出した。

部屋に漂う冷気に身を竦めた。自分の服装を見てみると、地味な灰色のスウェットを着ているだけだった。寝間着なのだろう。

改めて、周囲を見回してみたが、何の手がかりも得られない。

「むっ……」

唸り声を上げて、俺が考え込んでいると、ブーブーブーブー……。

「おっ」

音源の先、卓袱台の上に視線を向けると、そこには、スマートフォンが。手に取り、何故だがスムーズに動く指先に任せて、振動の原因をチエックした。原因は、メールだった。どこからかの迷惑メール。内容は、出会い系。全くもって手がかりにならなかった。

「はあ………」

溜息を附いて、

「あつ、そうだ、プロフィール！」

思い出して、声を上げ、スマートフォンを指先で操作しようとした。もちろん、目的はこの部屋の持ち主の特定だ。その時、突然の尿意。

「ツ……、と、トイレ！」

尿意に襲われ、トイレがあるであろう場所 玄関付近に俺は、足早に向かった。

そこにトイレは無かった、なんていう事はなく。トイレは、当然の様に玄関脇にあった。

俺は、トイレの電気を付けて、ドアノブを捻り。外に引くと、

「うおっ?!」

何か、大きな何かが転がり出てきた。

「はあっ?!?!」

思わず、目を剥き、叫んだ俺の視線の先には、

女。

「へ?」

混乱、そして違和感。違和感の正体には、一瞬で気づく。

そう、一糸纏わぬ姿、つまり全裸だった。

しかも、

「え、なんで?なんで?」

俺の混乱度合いは更に高まっていく。俺の視線は、とある一点を捉えて、動かなくなった。

その一点とは、女性の胸。決して、見惚れていたわけではない。唯、現実として、それを対処できなかった。それだけだった。そこには、刃が僅かに外気に晒されている木柄。

それは、一本の包丁。

その包丁が女性の双丘の間に突き刺さっていた。

「ツツ　　?!?!」

それだけの事で、俺の頭の中は、グチャグチャ。思考なんてまともにとまらなくなっていた。

数十秒。そうやって、女性を見下ろしていた。
そんな俺の頭の中に浮かんできたのは、一つの言葉。

『殺人』

更に、浮かんでくる、言葉の群。

『どっしって?』

『誰だ?』

『なんで?』

『誰が?』

『殺った?』

言葉が浮かんで消えていく中、それだけが、鮮烈な色をもって残っていた。

そこで、ようやく自分の取るべき行動に気付いた。

「そつ、そつだ！警察！」

今、手元には、誰かのか知らないスマートフォンがあるのみ。だが、仕方がない、持ち主には、悪いが緊急事態だ。申し訳ないが使わせてもらおう。

押す番号は、決まっている。

「いち、いち、せろ……」

動揺して手が震えている。押し間違えないようにに声を出しながら、
入力。耳に、スマートフォンを付ける。

深呼吸をして、どうにか、動揺をどこかにやろうと頑張った。

『はい、警察です』

落ち着く前に、警察が出てしまい、それも意味がなかったのだが。
相手は女性らしい。少し高めの声が特徴的で、事務的な喋り口調が
板についていた。

「あ、ああ、しつ、死体を発見したんですよ！至急来てくださ
い！」

『落ち着いてください』

「は、はい……」

俺は、警察の方に諭され、深呼吸をもう一度、繰り返した。
落ち着いた頃合いに。

『では、貴方のお名前と、発見場所の住所、もしくは、目印になる
物を教えてください』

「えーと、住所住所……」

俺は、何か手がかりを探して、周囲をうろつろつろしていると、

「お、請求書！」

俺は、声を上げて、卓袱台の上にある封筒に素早く手を伸ばした。

「えーと……住所は……」

電気代の請求書には、部屋の持ち主らしき名前と各種個人情報。その中の住所を伝え、自分の名前を言おうとしたその時、
気付いた。

もつとも、大切な事に俺は、今頃、気付いた。

「あ、ああ……」

声が、口から勝手に、こぼれた。

スマートフォンが通話状態のまま、床に落ちた。

声がそこから聞こえてくるが、全く、耳に入らなかった。

「俺は……俺は……」

そして、今、気付いた事実。

それは、

「俺は、誰だ……?」

名前が思い出せない。それどころか自分の事、他の誰かの事。何も思い出せない。

そして、それが意味するのは、

「記憶、そう、しっ……?」

呆然と疑問が混ざり合った声は、小さく響き、消えた。

「俺は……」

その部屋に響くのは、受話器の向こう側の女性の声だけだった。

〜1〜 (後書き)

感想、誤字脱字の指摘などお願いします。どちらでもしてくれれば
感謝感激です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222ba/>

エンカウントメモリーズ

2012年1月11日03時56分発行